

南部裂織とこぎん刺しの現代的表現に向けての試み

著者	川守田 礼子, 前田 奈々, 我妻 しのぶ
著者別名	KAWAMORITA Reiko, MAEDA Nana, WAGATSUMA Shinobu
雑誌名	八戸工業大学紀要
巻	36
ページ	197-203
発行年	2017-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1078/00003625/

南部裂織とこぎん刺しの現代的表現に向けての試み

川守田 礼子[†]・前田 奈々^{††}・我妻 しのぶ^{††}

Approaches for Modern Expression of Nambu Weaving and Koginsashi

Reiko KAWAMORITA[†], Nana MAEDA^{††} and Shinobu WAGATSUMA^{††}

ABSTRACT

Both Nambu Weaving and Koginsashi are traditional handwork in Aomori prefecture, and attract public attention in the area of handicrafts due to their beautiful colors, patterns and excellent texture. In this paper, new products placing emphasis on the modern sense and having an appeal for younger generations are suggested.

Key Words: Nambu Weaving, Koginsashi, traditional handwork, modern sense

キーワード: 南部裂織, こぎん刺し, 伝統的手仕事, 現代的感覚

1. はじめに

青森県には固有の風土、生活環境によって育まれ、長い年月をかけて継承されてきた伝統的手仕事がある。かつて青森県の農村地域では、寒冷気候のため木綿が栽培できず、日本海交易によって古手木綿として流入してきた木綿生地を、衣料品として最大活用するために、裂織および刺し子の技術が発達した。津軽地方、南部地方でそれぞれ独自の技法やデザインとして発展を遂げ、今日に至っている。裂織は「津軽裂織」「南部裂織」として、刺し子は「こぎん刺し」「南部菱刺し」として青森県の伝統工芸品に指定されている。歴史的にこれらの裂織および刺し子は、家族の日常着・野良着の保温性向上および補修・保全の目的で施されたのだが、

現代は本来の用途からは離れ、素朴なデザイン、色彩、風合いに手芸的な関心が集まり、衣服・日用品として幅広く展開されている。

八戸工業大学感性デザイン学部感性デザイン学科の3年次専門科目「地域文化論」において、地域の文化資源について学ぶという目的で、青森県の染織工芸品「南部裂織」「南部菱刺し」「津軽裂織」「こぎん刺し」を取り上げている。本講義を踏まえ、川守田研究室では、4年次「卒業制作・論文」において、これら伝統的手仕事をテーマとした卒業制作に取り組んできた。

本稿では、平成28年度卒業制作の中から、「南部裂織」および「こぎん刺し」に取り組んだ事例について紹介する。伝統的な技術に基づきながら、学生ならではの若々しいセンスにあふれた作品となっている。このような作品制作を通して、伝統的手仕事の現代的応用に向けての提案を行いたい。「南部裂織」を用いた卒業制作の制作者は感性デザイン学科4年我妻しのぶ、同学科4年前田奈々である。

平成29年1月6日受付

[†] 感性デザイン学部感性デザイン学科・准教授

^{††} 感性デザイン学部感性デザイン学科・4年

2. 南部裂織を用いた卒業制作

2.1 背景とコンセプト

制作者は、3年次「地域文化論」によって初めて「南部裂織」の存在を知った。講義を通して「南部裂織」の歴史と成立事情、発達過程に加え、技法や道具の概要について学んだ。

「南部裂織」は青森県南部地域、旧南部藩の農村地帯で近年まで保存継承されてきた伝統技術である。綿を生産できない寒冷地では、都市部から流通する古手木綿が非常に貴重であり、擦り切れるまで活用した。使い古した布は細かく裂いて緯糸とし、麻糸または木綿糸を経糸にして地機で織った素朴な織物が「南部裂織」である。自分または家族の仕事着や夜着、帯や前掛けなどに加工して日常的に使用する他、農閑期の手仕事として農家の収入源にもなった。裂織という伝統技法は全国的に見られるが、「南部裂織」の最大の特徴は、他の地域では絶えようとしている大正昭和期にむしろ多彩に展開しはじめ、主婦の内職として継承されることで、近年までその技術と織機が継承されてきた点にある。また、柳宗悦らによる民芸運動以降、「南部裂織」の民芸的価値を見直す傾向が高まり、裂織文化を途絶えさせたくない人たちによる、精力的な継承保存活動が現代まで続いてきたのである。

制作者は、裂織製品が、文房具や帽子、アクセサリーなど日用品や装身具として生活様式に合わせ幅広く展開されている点に興味を抱いた。また、布地として使用できなくなった古布を裂いて再利用するリサイクル織物で、厚みがあり意外と丈夫にできている点、古布の色と縦糸の色の組み合わせによって多様な色彩を生み出せる点、思い出を残したモノとして再生できる点などに大きな魅力を感じた。そこで卒業制作テーマとして「南部裂織」を選択し、「南部裂織」の技法を用いた、従来にないモノづくりに取り組むこととした。

これまで「南部裂織」が、家族の仕事着からインテリア用品の炬燵掛けへ、さらには土産品

としての雑貨類へと、その時代のニーズに合ったアイテムに加工されてきた経緯に着目し、本制作では、10代～20代の若年女性層をターゲットとした「南部裂織下着」を制作した。10代～20代層に指定した理由としては、特に若い年齢層を中心に「南部裂織」がさほど認知されていないからである。本制作にあたって技術指導をお願いした南部八戸裂織工房「澄」主宰者の井上澄子氏によれば、「小学生など子供に学校行事として裂織を体験してもらうことはあるが、それ以外の若い人たちが体験したり興味をもったりする機会が少ない。」とのことである。井上氏は平成28年11月まで八戸市ポータルミュージアム「はっち」のものづくりスタジオに工房を開設し、南部裂織製品の制作やワークショップ、伝統技術の魅力を伝えるイベント等を継続的に行ってきた。伝統工芸品「南部裂織」を知らない若年層に訴求する製品開発により認知度を高めなければ、伝統の継承および新しい展開は難しい。そこで、従来の南部裂織製品には見られない新鮮なアイテムであり、かつ、若年層が実際に使いたいと思えるモノとして、本制作では女性下着に着目した。ちら見せ下着やアウターとして見せる下着が昨今のファッショントレンドであり、若年層に人気である。インナーをアウターとして展開する際に「南部裂織」の質感や機能性が有効に活用できるのではないかと考え、「南部裂織下着」としてブラジャーとショーツのセットを制作した。

2.2 作品概要

最近のトレンドファッションを取り上げた書籍や雑誌を参照し、見せる下着のデザインを着装イメージとともに考案した。写真1・2は着装イメージのラフスケッチである。ブラジャー(図1)は上着の前を大きく開けて着装し、下着をタンクトップのように見せるデザインである。ショーツ(図2)はヒップハングのパンツと合わせ、パンツ上辺から下着を少し見せるデザインである。下着として身体を支える構造の安定性と肌触り、伸縮性(着脱のしやすさ)を考慮して、

既存の下着を土台とし、それに「南部裂織」で製作した生地パーツを縫い付ける形とした。下着のサイズは標準体型の寸法に合わせ、下着の土台と裂織生地を組み合わせパターンを数種考案し(図3)、これに基づいて製作する裂織生地のサイズを確定した。



図1 ブラジャー装着



図2 ショーツ装着

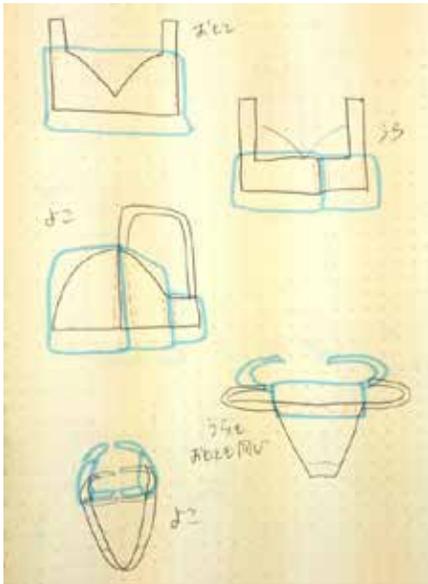


図3 裂織生地×下着の縫製組み合わせパターン

次に工房「澄」において、井上澄子氏の指導のもと基本的技術を習得したのち、裂織生地の製作を行った。緯糸に桃色の木綿浴衣地(写真1)を、経糸に同じ暖色系の赤糸を使用することにした。また生地に変化をつけるため緯糸に一

部、白色シースルー生地を加えることとした。木綿浴衣地は幅1cm以下、シースルー生地は幅2cm以下を目安に裂き、緯糸を作った。経糸を整えたのち、地機に2mほど掛け、織り作業を行った。木綿生地20cm、シースルー生地5cmを交互に織り(写真2)、約120cmの裂織生地を織り上げた。これを図3のパターンに合わせて整形加工したのち(写真3)、縫製を行った。



写真1 木綿浴衣地



写真2 木綿浴衣地の織り作業



写真3 織り上げた裂織生地(ブラジャー用)

写真4は、完成したブラジャーとショーツのセットである。裂織の緯糸に使用した浴衣生地をリボン状に加工し、ブラジャーの肩紐部分とショーツの紐部分に配して着用時のアクセントとした。下着の伸縮部分にはなるべく裂織を縫い

付けない構造とし、着脱時に不便がないように配慮した。また、肌に触れる裂織生地裏には肌触りの優しいシルク生地をつけ心地の向上をはかり、脇部分にはスリット、背部分にはホック止めを施して着脱しやすいよう工夫した。ブラジャーは数か所にダーツを取り、立体感やフィット感を高めた。ただし、ゆるやかにフィットして体の線を拾いすぎないように仕上げることで、多様な着こなしができるようにした。

図4は、「南部裂織下着」を用いたコーディネートイラストである。



写真4 完成作品



図4 コーディネートイラスト

3. こぎん刺しを用いた卒業制作

3.1 背景とコンセプト

制作者は3年次「地域文化論」における伝統技法の体験学習の中で「南部菱刺し」を初めて体験した。伝統工芸品に対して重厚で少々堅苦しい印象を抱いていたが、実際に体験してみて、針と糸があれば初心者でもできる刺し子の手軽さに驚いた。針を進めるごとに模様が着々と生まれるプロセスや、長い時間をかけて模様が完成した際の達成感、刺し子独特の優しい風合いに強い魅力を感じた。制作者は津軽地域出身で、「こぎん刺し」という「南部菱刺し」と同様の刺し子技法が津軽地域にあることを知っており、改めて地元の伝統技法に興味関心を寄せるようになった。

「こぎん刺し」とは津軽地域で継承されてきた刺し子の技法で、「南部菱刺し」と同様、菱型の単位模様が特徴である。「南部菱刺し」が偶数目を拾って刺し、横長の菱模様が形成されるのに対し、「こぎん刺し」は奇数目を拾って刺すため、模様はやや縦長の菱型となる。元来は、農村女性が家族の仕事着や室内着の布地を保温・補強するために施した針仕事であったが、現在はそうした生活の用途から離れ、手芸的な捉え方が強まっている。また、観光資源としても注目されており、津軽地域の土産品としてさまざまな「こぎん刺し」製品が展開されている。伝統模様を用いたものが多いが、中にはリングなど青森にちなんだモチーフを模様化したものも最近では見られる。しかし、「こぎん刺し」には絵画的表現の作品は見られない。そこで制作者は、「こぎん刺し」の新たな可能性を広げたいと考え、「こぎん刺し」の特徴である緻密な模様構成を活かした絵画のような作品制作を行うこととした。

本制作のモチーフには「こぎん刺し」と同様、津軽地域に関わるものを選びたいと考え、制作者の出身地である五所川原市を代表する祭りである「五所川原立佞武多祭り」に着目した。津軽地域の代表的な夏祭りとして「青森ねぶた祭

り」「弘前ねぶたまつり」「五所川原立佞武多祭り」が挙げられる。このうち「五所川原立佞武多祭り」は8月4日から8月8日に開催され、高さが最大で20mを超える「立佞武多」と呼ばれる巨大な山車の壮大な運行が特徴の祭りである。この「立佞武多」に描かれる絵柄を立佞武多絵という。題材は、日本の古典や中国の逸話に取材した勇壮豪快なものから、流行のキャラクターや時事的な要素を含んだものまで幅広い。例えば、東日本大震災の翌年には、復興の願いを込めて「復興祈願・鹿嶋大明神と地震鯨」が制作された。本制作では、2012年立佞武多絵「復興祈願・鹿嶋大明神と地震鯨」をこぎん刺しで刺したタペストリーを制作することとした。

3.2 作品概要

タペストリーの作品サイズは縦100cm×横50cmである。材料は木綿のコングレス生地（写真5）、木綿の刺し子糸および刺繍糸（写真6）である。

まず、立佞武多の館ホームページ掲載の立佞武多絵「復興祈願・鹿嶋大明神と地震鯨」¹の肉筆模写を行い（図5）、これを元に刺し子図案を作成した（写真7）。肉筆の立佞武多絵をこぎん刺しとして表現するために、方眼用紙に絵を描き写し、輪郭線を刺し子に適合するようアレンジしたうえで、各部分に刺す模様を決め、刺す目を記した。

模様は、伝統模様の中からデザイン特性や意味を考慮した上で数種選択した。鯨には本来鱗が無いが、「うろこ形」は古来魔性を意味するため、小さな「うろこ形」と糸刺しを組み合わせた「うろこ形の糸流れ」を使用することで、地震鯨の不気味さを表現した。鯨の周辺の水しぶきにも「うろこ形」を用いた。大明神のパーツについては、ひょうたんはそのまま「ふくべ」、要石には神聖な「さや形」、衣装には華やかな「花こ」、後光にはすっきりした「竹の節」をそれぞれ用いた。顔まわりや髪など曲線

が多く細かい個所に菱模様を用いるのは難しいため、単純な刺しを用いた。この図案に基づき刺し作業を行った。写真8は完成作品である。



写真5 木綿コングレス生地



写真6 刺し子糸（上）・刺繍糸（下）



図5 模写

¹五所川原市立佞武多の館「立佞武多ぬり絵ダウンロード」
http://www.tachineputa.jp/festival/pdf/extra_12.pdf

4. まとめ

本稿では、「南部裂織」および「こぎん刺し」の伝統技法を現代的な感覚で応用した学生作品を紹介した。このような伝統的手仕事は、農村の衣生活文化の厳しさの中で受け継がれてきたのだが、その歴史的な背景から軽やかに飛び立ったこれらの作品には、若い世代らしい感性が光っている。そのまなごしには、先人が培ってきた知恵と人への思いに対する敬意と、伝統の魅力をより多くの人に伝えたいという情熱がうかがえる。今後もこうした伝統技法の現代的応用に向けてのさまざまな提案を継続していきたい。

謝 辞

「南部裂織」作品を制作するにあたり、南部八戸裂織工房「澄」主宰者の井上澄子氏には、多くのご教示・ご指導をいただきました。ここに厚く御礼申し上げます。

参考文献

- 1) 井上澄子：裂織読本初級編，LLP 技術史出版会，2007.
- 2) 井上澄子：裂織読本中級編，LLP 技術史出版会，2008.
- 3) 井上澄子：裂織読本上級編，LLP 技術史出版会，2009.
- 4) 田中忠三郎：図説 みちのくの古布の世界，河出書房新社，2009.
- 5) ストリート編集室：STREET 2016年11月号，ストリート編集室，2016.
- 6) 渡辺明日香：東京ファッションクロニクル，青幻舎，2016.
- 7) 弘前こぎん研究所：津軽こぎん刺し 技法と図案集，誠文堂新光社，2013.
- 8) 青森県庁：<http://www.pref.aomori.lg.jp>
- 9) 東北 STANDARD：<http://tohoku-standard.jp>
- 10) 南部裂織保存会：<http://www.sakiori.jp>
- 11) 五所川原市立倭武多の館：<http://www.tachineputa.jp>
- 12) 青森県観光情報サイト アプティネット：www.apтинet.jp



写真7 刺し子図案



写真8 完成作品

要 旨

南部裂織とこぎん刺しは、いずれも青森の伝統的手仕事であるが、色彩、模様、風合いの良さから手芸分野での注目が集まっている。本稿では、現代的感覚を重視した、若い世代に訴求できるような新しい製品の提案を行う。

キーワード：南部裂織，こぎん刺し，伝統的手仕事，現代的感覚